

とらえられて生きる

[聖書] ヨハネによる福音書 21 章 1～14 節

その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子どもたち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いたがそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

[序] コロナ禍の「日常」の中で

今私たちはそれぞれの場所で礼拝を守っています。もう三週間目になりましたね。週報やメッセージの原稿を郵便物で受け取っておられる方は、それが届いた日に礼拝を持っていらっしゃるということもお聞きしています。本当に一緒に礼拝出来たらどんなにいいだろうと思いますよね。けれどもどうでしょう、不思議と孤独というよりは、皆の礼拝のための祈り、また、教会に連なっているお互いのための祈りの中で、心が通うような気持ちを与えられて礼拝を守ることが出来ているように思うのです。あなたはどうでしょうか？

新型コロナの影響で多くの店がお休みをしていますね。新聞の記事を読んで、面白いなあと思ったのですが、店主が店の外に張っている張り紙に個性があるそうです。或る商店街の張り紙が紹介されていました。…「こんにちは！〇〇商店街広報のHです。新型ウィルスの進行がとどまらず、暗いニュースが続いており地域の皆さま非常にお疲れのことと思います。こんな時期だからこそ、皆で力を合わせて乗り越えなければ！私たち商店街は地域の活力を落とさないよう、やれることを日々全力でやり続けます！」。また、或るお店にはこんな張り紙が貼ってあるそうです。…「コロナ感染拡大防止のためお店をしばらくの

間お休みします。営業の再開は状況を見て判断します。(一行間をあけて)生きていれば、色々あります。店主」。—いいなあと思いました。絶対に大変だと思うんですよ、個人経営などのお店は特に。でもそんな中で、「やっていくぞ」という意志、「生きていくぞ」という意志を感じます。「生きていれば、色々あります」と言えるということは、もうそれ自体、打ちのめされていない証拠ですよ。それは、読んでいるこちらにも励まされるものがあります。このコロナウィルスは本当に厄介ですけども、私たちにとって一番大切なことは、それがあろうがなかろうが、毎日毎日の「日常」を生きていくということですよ。

[1] 派手なことではない復活物語

ヨハネ福音書の最後の章・21章の1~14節には、復活されたイエス・キリストが、三度目に弟子たちに現れた時の出来事が記されています。十字架で惨い死を遂げた筈の主イエスが、今復活の主として、都エルサレムではなく、弟子たちと出会い、招き始めた彼らの生活の場、ガリラヤ地方のティベリアス湖(ガリラヤ湖)の岸辺で、出会っておられます。

しかしいくらもう三度目だからと言っても、**死から甦った方**との出会いの出来事であるとするなら、もっと劇的な描写があっても良いのではないかと思います。けれどもここにあるのは、天地がひっくり返るような驚くべき出来事としてと言うより、何ら派手なことでもなく、言ってみれば、岸辺でイエス様と朝の食事を一緒にしたという、とても静かな、日常の一コマのような出来事として描かれています。そして、それが聖書が伝えようとしているとても大事なメッセージなのではないかな、と思うのです。

弟子たち(ここには7人がいたようですが)は、イエス様の復活後ガリラヤに戻っていたようです。そこは彼らのいわば原風景の場所であったと思います。「あなた方を人間を獲る漁師にしよう」と、イエス様が声をかけて下さった場所です。先週も見ました通り、彼らは既にイエス様の復活に触れています。けれども、またイエス様の姿は見えなくなっていました。彼らはどこか**宙ぶらりんのような気持ち**の中にいたのではないかと思います。故郷ガリラヤに戻っては来たけれど、これからどうやって生きて行こうか。まずは食べていかなければいけない。それで夜中に舟を出して漁をしたのはいいけれど、一匹も魚はかからなかった。労働が**徒労**に終わった。彼らはまるでイエス様に付き従ってきた日々が空しく思えてしまうようなやるせない気持ちを抱えていたのではないのでしょうか。そんな**疲れと無力さ**の中にある時に、彼らの「**外側**」から**声が響いてきた**のです。4節以下にこうあります。

「既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」

確かに驚くべき出来事を経験したのです。しかし又、これはかつてこの湖で経験したことの焼き直しでした。ルカ福音書5章にありました。原点回帰でしょうか。いや、そうではなく、今声をかけてくれているのは、**死から甦ったお方**です。**復活の主と共に生きる**ということがどういうことか、それを知らせるため、主イエスは夜の間も**先回りして**そこにおられ、そ

して彼らの無力さの直中に、**ご自分の方から**生活の言葉として声をかけて下さったのです。

[2] 人生のハンドルを握る方が変わる

私は今回この箇所を読んでいて、一つ発見したことがあります。出だしの1節にこうあります。「その後イエスはティベリアス湖畔で…」。これは、**主イエス様が主人公**の物語なのです。**イエス様が**、ペトロやその他の弟たちに出会われたという話として書かれているのですね。これまでは弟子たち自身の力で生きてきたけれど、この時から**人生のハンドルを握る方が変わる**ということなのだとは私は思います。ここで**主導権**を握っているのはイエス様ですね。

信仰とは、**イエス様への絶対信頼**ではないでしょうか。「**自分**」という城を**イエス様に明け渡す**ことです。けれども人間にはなかなかそれが出来ません。ペトロは、イエス様だと分かった時に「**上着をまとって**」海に飛び込みました。滑稽にも思えますが、彼は裸で**イエス様の前**に出ることが恐ろしかったのではないのでしょうか。まだ**明け渡し切っていない**のです。それをペトロにさせるのは、21章15節以下にあるイエス様の招きの言葉が**決定的**だと思いますが、その直前に、今日読んだ、イエス様が弟子たちのために朝の食事を整えて下さっていたという記事があるんです。9節からお読みします。

「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。イエスが、「**今とった魚を何匹か持って来なさい**」と言われた。シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。イエスは、「**さあ、来て、朝の食事をしなさい**」と言われた。」

イエス様は、弟子たちのことを**すべてご存じ**なのです。ほんの少し前のイエス様の十字架というのは、彼らにとって**自分の弱さや卑怯さを直視**させられ、**罪や悔いの思いを思い出さずには**いられないことだったろうと思います。そんな彼らに復活したイエス様は出会って下さいましたが、彼らの心の痛みは大きかったと思います。生きる力が出てこない。復活の主と出会っても、力がみなぎってこない。…私たちの信仰生活もそういうことがあるのではないのでしょうか。『**勇気 100%**』なんていう歌がありますけれども、人間、まるで変身するかのように、ボルテージが急激に上がったたりするなどということは滅多にないと思います。

それよりも復活のイエス様は、今日の箇所のように、もっと私たちの日常の中にひっそりと入りこんで、私たちの思いをじっと耳を傾け、その日その日を生きられるように力を与えて下さるのではないのでしょうか。「**さあ、来て、朝の食事をしなさい**」と、イエス様ご自身がご用意くださる糧を与えて下さる。—イエス様ご自身が与えて下さる糧。それは何より、**主の晩餐**ではないのでしょうか。即ち、主イエスご自身という糧です！私たちを生かす方は、他の誰でもなく、イエス様なのだ、主は私たち一人ひとりの罪や弱さをよーくご存じの上でそれを赦し、受け容れ、主イエスご自身の命に与る者として下さる、ということだだと思います。

読んでいて、12節の後半の言葉は、とても大事な言葉だと思いました。—「**弟子たちはだれも、「あなたは何者ですか」と問いたがそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。**」—これが、主が復活されて弟子たちに、そして私たちに出会って下さる**目的**ではないか

と思いました。この方こそ、私の主、私の神だ。他に私の神様はいない。この、十字架と復活の主こそが私の神様なのだ、だから私は何も恐れない。そう言わせて下さるほどに主は私たちに近づき、私たちをとらえて離さないのだと思います。

[結] 主イエスにとらえられて

弟子たちはイエス様が言われた通りに網を打ったところ、153匹もの魚が獲れ、しかも11節には「それほど多くとれたのに網は破れていなかった」と書いてあります。私は、これは弟子たちが「人間を獲る漁師」へと導かれていく出来事であると共に、弟子たちもまた主によってしっかりとらえられているのだ、このイエス様の愛と言う網は破れることはないのだ、ということをも物語っているように思えるのです。復活の主は、私たちの日常の暮らしや、また悲しみの中、或いは先が見えない今の新型コロナウイルス状況下の中でも、この「主の網」は決して破れず、私たちをその御腕に抱き、神の国まで導いて下さるに相違ありません。

「信仰」というのは特別なことではないと思います。私たちの日常の中で、「あれは主だ」と、「ああ、こんな中にもイエス様居て下さったんですね」と言わせて頂けるような出会いが、私たちが召されるまで、繰り返し繰り返し与えられるのではないのでしょうか？「あなたが生きることが出来るように私はあなたに日ごとの恵みを与えます。あなたは私の与える糧を食して生きよ！私自身をあなたの命として欲しい。そのためにこそ、私は死から甦って、あなたの中に住んでいるのだから」と今日もおっしゃっているのだと思います。

最後に、ヘンリ・ナウエンが書かれた『今日のパン、明日の糧』から、ある日の黙想の言葉を読ませて頂きます。

「人生は予測不可能です。今日は幸せでも次の日は悲しみ、今日は健康でも次の日は病気、今日は金持ちでも次の日は貧乏、今日は生きていても次の日には死んでいるかも知れません。では一体誰にすがれるでしょう。誰と一緒にいれば安心できるでしょう。誰ならいつも信頼出来るのでしょうか。キリスト・イエスだけです。イエスは私たちの主、羊飼い、岩、砦、避け所、兄弟、案内人、友。イエスは神から来られ、私たちと共におられます。イエスは私たちと共にずっと留まってくださるために、神から来られました。そして私たちに神への道を開くために死から復活し、私たちを迎えてくださろうと神の右に座しておられます。『わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです』（ローマの信徒への手紙 8:38~39)。」アーメン！

お祈り致します。一主よ、あなたは私たちの罪のために死に、しかし、こんな私たちと共に生きて下さるために復活して下さったお方であることを知り、感謝致します！私たちは自分ではあなたの前に裸になることが出来ない者です。しかしあなたの方から、正に日常の中で近づいて下さり、私たちを癒し、あなたの愛の確かな網の中で私をとらえて下さいます。あなたこそ私の主、私の神です。私の人生を、喜んであなたに明け渡します。あなたが主導権を取ってこれからも導いて下さい。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。